

# 日本古代における彩色材料の変遷

## Transition of coloring material in ancient Japan

國本 学史 Norifumi Kunimoto 慶應義塾大学大学院  
Graduate School of Letters, Keio University

キーワード: 色材 色彩文化 材料史

Keywords: coloring material, cultural history of color,  
history of material

### 1. はじめに

8世紀頃の日本において、彩色材料の種類と用途が大きく増加したことは文献史料の上から見る事ができる。彩色材料の種類が増加した理由の一つとして、対外的な貿易の発展があり、当時政治的にも経済的にも交流のあった朝鮮半島や中国大陸との交渉を通じ、彩色材料そのものが多数流入し、原材料がもたらされ、技術が伝えられ、技術者が渡来したという背景があった。

その後 16-17 世紀頃に新たな彩色材料がもたらされるまでの間、彩色材料の用い方は、8 世紀頃における彩色材料に対する理解と使用方法を基本知識として、大きく変わることはなかった。

しかし、5-6 世紀頃の遺物である、装飾古墳と呼ばれる古墳遺跡には既に様々な彩色が施されており、また 8 世紀以前の文献上にも彩色材料に関する記載を見ることができるのである。

古代日本において 8 世紀頃にもたらされた彩色材料に関する知識や技術が即座に吸収され、発展させられたというのではなく、日本における彩色材料への理解は、古墳時代を通じてかなり進んでいたことを本研究において指摘する。

### 2. 原初的使用

日本という地域に限らず、文化的に原初に近い状態の社会であれ、彩色に対する志向がある。

その場合、彩色の対象は絵画・彫刻という芸

術に限定されず、むしろ日常生活に関係するものであることが多い。社会における装飾的な志向に応じて装身具や化粧が一般的になるに従い、彩色のバリエーションは増加した。直接体に塗布したり、顔に化粧のように施したりする形での彩色材料の使用が行われた。

弥生時代になると、赤色の彩色材料が表面に施された土器が多く作られるようになったことから、この時期には器物に彩色を施すという行為が行われていたことを推測させる。

『魏志』東夷伝倭人条に、倭人が朱を体に塗るという記述や、贈答品として真朱・鉛丹を倭の王に贈る、という記述が見られる<sup>1</sup>ことから、5-6 以前においても、彩色材料についての認識をある程度有していたことが分かる。

### 3. 祭祀的使用

原初的な社会構造が発展して行くにつれ、少数の貴顕を中心とする国家体制が成立し、祭祀的な意味合いでの彩色材料の使用が増加する。

特に政治的権威を強化するための手段として、祭祀的な建造物や装身具といった造形物が多く作られるようになり、使用される彩色材料の種類も増加した。

日本の古墳時代に広く行われた習慣として、「施朱」がある。この「施朱」というのは、文字通り朱を用いて、あるいは朱と同じく赤い色の彩色材料を用いて、死者の遺骨や遺品、墳墓内の玄室や石棺に彩色を施す行為のことである。

<sup>1</sup> 「以朱丹塗其身體如中國用粉也」

「真朱鉛丹各五十斤」

らの記述

施朱という呼称ながら、実際に使用されている彩色材料は朱だけではない。より多く使われるのはベンガラのような入手の容易な材料であり、天然産出物の辰砂・硫黄と水銀から作られる朱沙にせよ、朱を用いていたケースが全てではない。

発色から考えると、同じような色を呈する当時の彩色材料としては朱だけではなく、ベンガラ・丹・臙脂(烟子・烟紫)・紅花などがあつたが、それぞれ鉱物性の顔料・動植物性の染料として性質が異なり、劣化する速度も異なる。

着色力が強く、顔料系の彩色材料よりも鮮やかな発色をしながらも、石のような支持体に塗布されると退色しやすい染料類を用いることはあまり行わず、入手し易く、かつ長期間に渡って色が保持されるベンガラを多く用いていたということから、古墳時代に彩色材料に対して性質に対する相応の理解があつたことを伺わせる。

朱だけでなく彩色材料の記載は「記紀」内に見られ、『続日本紀』には、彩色材料とその産地についての記載まである<sup>2</sup>ことから、少なくとも絵具として、顔料として加工される前の原材料についての理解が存在し、さらにいくつかの彩色材料が日本国内で採取されていたことを示している。

#### 4. 国家事業と彩色材料

古墳時代を経て、中央集権的な統一王権が日本に誕生し、国家規模で王権と国威発揚のための造形物が作られるようになった。

古代において最も顕著なものは、奈良時代における大仏殿の建立と国分寺の建設であると言える。さらに仏教文化が流入し、広く信仰を得たことによって宗教的な造形物の種類は大変増加し、それに伴って建築・彫刻・絵画といった芸術品が多く制作された。

<sup>2</sup> 『続日本紀』巻一 文武二(698)年 九月乙酉廿八「乙酉。令近江國獻金青。伊勢國朱沙雄黄。常陸國。備前。伊豫。日向四國朱沙。安藝長門二國金青緑青。豊後國眞朱。…」

このことは同時に、彩色材料の種類が増大し、効率的に用いられたということも示している。現存する諸芸術品の一部には、当時用いられていた彩色材料が残存しており、一種法則的で、何かしらのルールに則っているかのような使用方法であつたことが分かるのである。

組織的にも彩色に関わる工人達は良く統制され、様々な機関に所属して彩色技術の伝播が互いになされたことは文献から知ることができる。

#### 5. おわりに

彩色材料を扱う工人たちの元となったのは、血族による分業により、彩色材料についての知識と技術を独占してきた画業専門工人たちの集団であり、彼らが数世紀に渡って蓄えた知識は、古墳時代頃より伝えられて来た彩色材料の劣化や退色、多くの顔料や染料同士の性質に応じた使い分けの手法に基づいている。

8世紀以前の文献史料上に記載されている彩色材料は、採取した原料を加工する必要があり、顔料・染料によって加工・保存方法が異なり、性質的にも組み合わせて使用する上で細心の注意を必要とした。

8世紀に彩色材料が体系的に使用されるようになり得た要因は、海外貿易によって最新の技術や人的資源が新たにもたらされたことのみによるのではなく、彩色に携わった工人たちが、彩色材料の性質、材料の使用法といった知識と理解を、数世紀に渡り蓄積してきたことに他ならない。

#### 参考文献

- [1] 小口八郎「日本画の着色顔料に関する科学的研究」『東京芸術大学美術学部紀要』5 1969年7月
- [2] 永島正春「装飾古墳の色彩と素材」『国立歴史民俗博物館研究報告』80 1999年3月
- [3] 國本学史「八世紀日本彫刻の彩色材料 一材料の性質と適性に関する問題を中心に一」『美学』227 2006年12月